



あなたが選ぶ暮らしの未来

大分を創る

16 第4部：地域医療を考える ③



4 かかりつけ医の新たな姿探る

二〇〇〇年十二月、大分市玉沢の国道210号バイパス沿いに「わさだメディカルタウン」の看板が上がった。

カラフルな建物七棟に小児科、耳鼻科、整形外科、眼科、皮膚科、歯科、内科リウマチ科のクリニック（診療所）。バイパスを隔てて大型商業施設・わさだタウンがある。

同市のわさだ副都心計画で姿を変えるまで、一帯は田畑の農業地帯だった。

「夫は内科、母は整形外科、わたしは息子を小児科に連れて行きます」

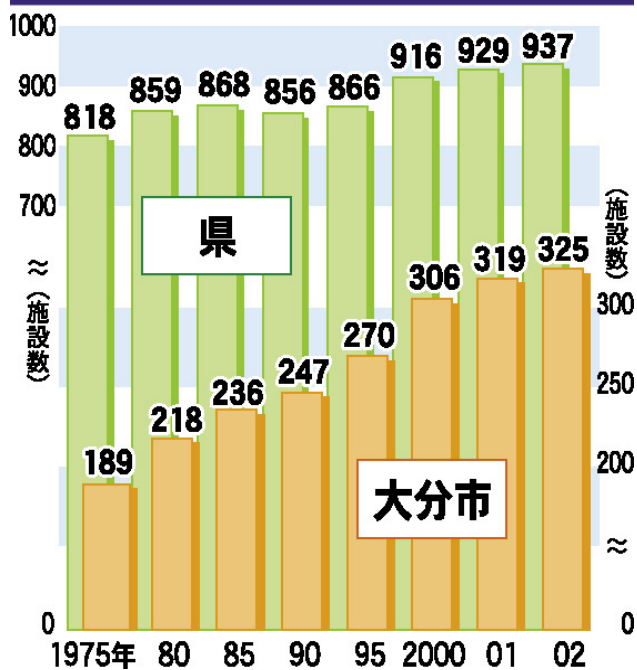
同市大道町の主婦中村桂子さん（36）とその家族が車から降りた。「家族それぞれの病気やけがに合わせたお医者さんがいます



新しい地域医療の形を提案するわさだメディカルタウンの医師、看護師、事務員ら

二〇〇四年
六月九日

県と大分市の一般診療所（クリニック）数の推移



ており、必然的に専門医となった。入院は出身病院に依頼するなど他のクリニックや病院とのネットワークを大切にしています」と皮膚科の三浦芳子医師(39)。「専門」と「連携」をキーワードに地域医療を考えたいと言う。

メデイカルタウンの医師は、かつては県立病院や大分赤十字病院、大分医大付属病院など総合病院の勤務医。内科リウマチ科の大塚栄治医師(51)は「効果的な薬の開発でリウマチの治療に必ずしも入院を必要としなくなった。専門医としての医療を進めたい」と話す。タウンには入院設備がない。「今の医学部は医局・講座が細分化し

し、総合病院よりも気軽に受診できますから」。中村さんは今年四月、会社員の夫勝則さん(42)の転勤で大阪市から引越してきた。「病院も医院も知らない。どこがいいのかと、かかりつけ医を探した結果がメデイカルタウンになった」と言う。「どうも調子が良くない。何が原因なのか、専門の医師に診てもらえば安心できる」と勝則さん。

七クリニックと一薬局が並ぶメデイカルタウンは、それぞれの診療科目を合わせると、総合病院のようになる。副都心計画を見越して、安東調剤薬局(同市)の安東哲也代表(52)が土地を確保し、医師に開院を持ち掛けた。「病気の人はそれが治ると聞けば、どこにでも出掛ける。何よりも、がんや生活習慣病の予防で専門医志向が強くなった」。

都市部では病院、診療所間の競争も目立ってきた。同市椎迫の伊東啓医師(55)は「九〇年の開業時は校区で八番目のクリニックだったが、現在は十七。周辺だけでも競争原理が働いているのに、わざわざですか…」と苦笑する。

伊東医師は、今も本耶馬溪町で現役医師の父親(82)が往診に出掛ける姿を見て育った。専門は放射線科だが、医院には内科、循環器科、放射線科と多くの診療科目を掲げている。

「わたしは地域のかかりつけ医。専門性も大事だが、人間の体はもっと総合的なものだ。『木を見て森を見ず』では見えるものも見えない、治るものも治らない」。

地域のかかりつけ医はどうなるのか。団地住民の増加、核家族化など、希薄化する地域の変質もある。伊東医師は「地域を知り、患者を知る中から、新たな家庭医像を探っている」と話した。

5

救命の切り札 行政が足かせに

二〇〇四年

六月十日

「日田に住んでいて本当に良かった。おかげで命が助かったんですから」。五十代半ばの男性は一年前の出来事を振り返った。

昨年六月、日田市の職場に転勤したばかりだった。工作中、突然、気分が悪くなった。胸が熱く、心臓に強い圧迫感。心筋こうそくだった。同僚に車で十分の医院に送ってもらおうと、ベッドの上で意識を失った。

医師による心臓への電気ショックで意識が戻った。運良く、医院には久留米大学病院(福岡県久留米市)からの派遣医がいた。「緊

急に治療が必要」と久留米大高度救命救急センターに連絡した。

「救急車で三隈川河川敷のヘリポートに着くと、ヘリコプターが待っていた。心臓は止まってから五分が勝負。意識を失った場所、ヘリが飛んで来た幸運が重なりました」と医師。

ヘリは、福岡県と厚生労働省の事業で久留米大が運営するドクターヘリだ。出動までわずか三分。医師と看護師が同乗し時速二百三十キロで飛ぶ。久留米・日田間は十二分。男性は発病から約四十五分以内で高度救命救急センターに着いた。日田市には高度な「救命医療」が行える医療機関はない。ほかに手当てを受けるとすれば、大分市内の医療機関となる。男性は「大分市だったら間に合わなかったかもしれない」と話す。

県内へのドクターヘリ出動は二〇〇二年度十四件、〇三年度三十四件。いずれも命を救うことへとつながったのだが、実は、今年六月以降は県内に飛来しなくなった。「久留米大のドクターヘリを活用する予定はない。救急車で対応できない場合は県央空港（大野町）の県防災ヘリを使う」と県医務薬事課。



「ドクターヘリ」で久留米大学病院の高度救命救急センターに搬送される患者＝久留米大学病院

ドクターヘリはどのようなのか。久留米大高度救命救急センター長、坂本照夫教授は「病院間の連携で大分県にドクターヘリを出動させていた。行政間のかかわり、運用費の負担問題がネックになっている。道路事情がよくない中山間地では、いつも医師が搭乗するヘリが威力を発揮するのだが…」と話す。

救命から回復へ。湯布院厚生年金病院（湯布院町）では、日田市 の貴志浩平さん（34）が機能回復訓練を続けている。○一年十二月、交通事故で脳挫傷、くも膜下出血、頭がい骨骨折の重傷。一命は取り留めたが、左半身はまひ、物忘れも激しい。「家に帰って暮らせるように…。それが一番ですから」。言葉が不自由な貴志さんに代わって、母親のキヨミさん（76）がそう話した。

同病院には県内で数少ない回復期リハビリ病棟がある。心疾患や脳卒中、事故などで一命を取り留めた人たちが手や足、言語の機能回復訓練に励んでいる。病床数二百九十七、理学療法・作業療法士は計約七十人。全国でも二十指に入るリハビリ専門病院だ。毎月約四十人が退院。七割が自宅に戻り、在宅生活を始めるという。「病気や事故から助かった命を自宅や地域で支えるシステムが必要です。完全な機能回復は無理でも、豊かな人生は過ごせると地域でサポートする体制をつくりたい」と有田真院長。

昨年夏、同病院は県の県地域リハビリテーション支援センターに指定された。専門病院のリハビリのノウハウを地域に広めていく考えだ。

◇地域リハビリテーション

運動機能の回復だけでなく、高齢者や障害者が地域で生き生きと安心して暮らせる環境づくりを進める考え方。県内では、各保健医療圏ごとに県地域リハビリテーション広域支援センター（病院など）がある。地域リハ調整者の養成や人材マップ作成、合同研修会などが始まっている。

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN (なんなん)」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分を創る」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!



デジタル版「大分を創る」 その16

編集 大分合同新聞社
 初出掲載媒体 大分合同新聞 (2003年6月29日～2005年11月5日)

《デジタル版》
 2010年8月27日初版発行

編集 大分合同新聞社
 制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部/川村研究室
 発行 NAN-NAN 事務局
 (〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 企画調査部内)

●デジタル版「大分を創る」について

「大分を創る」は、大分合同新聞社がNHK大分放送局との共同企画として2003年6月から2005年11月まで、同紙に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。
 2010年5月14日 NAN-NAN 事務局